

# 教育に関する倭語の原義

教育心理学研究室 木村俊夫

(昭和49年10月12日受理)

## 1 ヒト—人間観—

ヒトという語には、記紀・万葉では人の字が最も多く当用されている。仮名には、比等(神武記他、応神紀13年他、万904他)・比登(雄略紀13年万3691、他)・比苔(神代紀上、景行紀40年)・譬苔(神功紀1年)・臂苔(仁德即位前紀、他)・臂等(仁德即位前紀、他)・毗騰(雄略紀1年)等が使用されている。万葉仮名の類別によれば、第1字は甲類、第2字は苔以外は乙類である。苔は苦ないし台の同類とすればやはり乙類である。

ところで、上代の皇統に繋がる神や人の名の多くは、ヒコ(記：日子・日古・比古・毘古、紀：彦)・ヒメ(記：日女・日売・毘売、紀：姫・媛)の語を含んでいた。当用される字は皇統との関係に規定される面があるが、ここでは問わない。ヒは、日神(天照大神)に繋がり、火神には繋がらない。日・比・毘は甲類、火は乙類だからである。

人格神を捨象したヒ(日)は、巨大な光源としての太陽を意味し、ここから感性的な光・照明・暦日に関する多くの概念と同時に、タカミムスビ(記：高御産巢日、紀：高皇産靈、捨：高御魂、延喜式：高御産日)・カミムスビ(記：神産巢日、紀：神皇産靈、延：神産日・神産魂・神魂)・タマツメムスビ(捨：魂留産靈、玉積産巢日・玉留魂・魂留魂)等の霊的な概念を成立させている。

皇産靈の読み方は紀の訓註「皇産靈此云武須岐」による。ヒヒは、日と同じく甲類とみられる。記伝によれば、「ヒヒは、書紀に産靈と書れたる、靈クビ字よく当れり。凡ての物の靈クビなるを比と云(久志見の毘も是なり)」(係代二)である。また、「産巢は生なり。……苔の武須など云牟須にて、物の成出るを云ッ」・「産靈とは、凡て物を生成すことの靈クビなる神靈」(問)であった。

日神は高・神2柱のムスビの神を含めた天神を祀る神であった。日神の権威と霊性の根源はムスの機能にあったのである。神話におけるムスビの構想にはPlotinos(204～270年)の流出説を想起させるものがある。しかし、ここでは問わない。紀によれば、大化2年の詔に「万物

之内人是最靈」とある。ヒトのヒは、ムスビの霊性を意味すると解さねばなるまい。

ヒトのトは、水門・山門や伊多斗・麻幣斗(戸)のトではない。末に対する母登(仁德記)・望苔(仁德即位前紀)・模騰(孝德紀)、本国の毛等(万4245)、大和の八間跡(万2)・夜麻登(記多数)、美著登(記)・美保止(延喜詞類聚)のトで一定のトコロである。

以上を要約すれば、ヒトの原義は“ムスビの霊性の於て在る場所”“ムスビを場所的に分有する局所”ともいふべきものであろう。いずれにしても、ヒトという語は、普遍を原理とする世界観のなかで、人を捉えようとしたものであることは間違いない。

嘗てヒトをSonnen-Ortと独訳した人がいたことが想起される。しかし、倭語に即して言えば、ヒトは、ヒトのコでありやがてヒトのオヤとなる。したがって、ムスコ・ムスメは、単にnatura naturantaであるに止まらず、natura naturansである。Eriugena(810～880年)流に言えば、natura creans creataである。しかし、人は、単なる人ではなく、ヒコ・ヒメであり、ヒトはヒコ・ヒメの総称でもあったのである。

## 2 児童観—発達の存在—

万葉に見える竹取翁の人生回顧の長歌(3791)には、人の発達過程に伴う各期の呼称や髪形、服装の変化が描かれている。次ぎにその要点を摘記してみよう。

緑子之若子蚊見庭...	襦袢
平生蚊見庭	結經肩衣永津裡丹縫服
類著之童子蚊見庭	結幡之袂著衣
丹因子等荷四子庭	三名之綿蚊魚為髪尾
	於是蚊寺童
	最末典而髪纏見
	解乱童兒丹成見

ここに見えるミドリコ・ワクゴ・ワラハ等の語は、人



初発について記伝は「初発之時は波自米能登伎と訓べし」・「初発をハジメテヒラクルと訓るのはひがごとなり」(記伝三)としている。そのハジメは、紀が記すごとく渾沌であった。しかし、その渾沌は、永久ではなく、やがて分化する可能性・力動性を内蔵していた。それを、記紀は「葦牙」に譬え、記はさらに「萌騰之物」と記している。そういう渾沌であったから、紀は未割としたのであろう。

してみれば、記紀の開闢神話における稚は、“分化への力動性を内蔵している状態”を意味する。この稚はワカキ・ワカク等と訓むべきであろう。こういうワカに対して、一般に、記は若、紀は稚を当用している。記が上記のごとく稚を用いたのは例外と言ってよい。

紀の割と分は一般にはワカレと訓まれている。これは、万葉の「和可礼須流」(36/94)・「和可禮加弓爾」・「和可礼之久礼婆」(44/98)等の仮名書例により保証されよう。最前者は名詞、後二者は自動詞、下二段の連用形である。

万葉では、ワカシ・ワカルのワカはともに和可である。記伝には「和詞志とは、凡て物の未だ成りとゞのはざるを云て、…万葉に三日月を若月とも書き、推古紀には肝稚と云ことも見えたり」(記伝三)とある。以上を要約すれば、ワカコとは、“未分化なコ”、“未完成のヒト”であろう。

## 2・4 ワラハ

紀に「集<sub>2</sub>少年<sub>1</sub>、令<sub>2</sub>習<sub>2</sub>伎楽舞<sub>1</sub>」(推古紀<sub>20</sub>年)という記事がある。紀の編集者自身がこれをどう読んだかは分らない。しかし、一般にはワラハベと訓まれている。ワラハベは今日のワラベの古形で、べは複数を意味する。女性が謙称に用いた姿は中世以降における用法変化によるものであろう。

ワラハの仮名書の初見は、日本霊異記(823年<sub>以下</sub>霊異記)の「村童<sub>左</sub>平和<sub>部</sub>」(下)であろう。倭名抄には「童、和良波、未冠之称也」とある。万葉の小童(25/82)・童子(37/91)・童児(37/91)等は、一般にワラハと訓まれている。しかし、そう訓んでよいという極め手は、霊異記以外には見当たらない。

本章の初めに掲げた長歌の1節は、ワラハの語と髪形の関係を示しているらしい。初めの童子は子供、後の童子は髪形である。

万葉に次ぎのような酷似した歌が2首ある。

橘<sub>チハ</sub>寺之長屋爾 吾率宿之 童女波奈理波 髪上都良武可<sub>(38/22)</sub>  
橘<sub>チハ</sub>之 光有長屋爾 吾率宿之 宇奈為放爾 髪興都良武香<sub>(38/23)</sub>

これから、童女はウナキ、放はハナリ、ウナキハナリは結髪年齢以前の髪形ないしその髪形をした少女、等であることが推定される。

ウナキのウナは、ウナジ(項)の古語で、熟語に「宇奈我既利」(万4125<sub>項に手を懸け</sub>)・「宇奈稚流珠」(万3875<sub>項に懸けた玉等</sub>)がある。

キは、「宇泥備夜麻 比流波久毛登章」(神武<sub>記</sub>)と同様であろう。ウナキは、項付近で髪を束ねるか切り下げる形で、幼童の髪形である。倭名抄は、髪を「和名字奈為」と記している。転じて、この髪形をする年齢の子供を意味する。

ハナリは、「放髪」(万12/44)とも記されるが、ウナキハナリの約語である。髪を束ねず肩まで垂らす髪形である。転じて、この髪形をする年齢の少女を意味する。万3822の左の詞書に「称<sub>2</sub>若冠女<sub>1</sub>曰<sub>2</sub>放髪<sub>1</sub>」とある。

束ねないウナキやウナキハナリは、活潑・無頓着な動作で、髪がバラバラになり易い。万葉は、バラバラになることを「綿も無き布肩衣の 海松のごと和和氣がれる」(89/2)のごとくワワク(自下二)と言い、その様を「秋萩の末和和良葉に」(15/18)のごとくワワラと称した。

このワワラから、一方においてワラハ ⇨ ワラハベ ⇨ ワラベ ⇨ コワッパ、他方においてワラワラが成立したと考えられる。この推測が正しいならば、本章の初めに掲げた長歌のなかの童児は、項か肩まで伸ばして束ねない髪形であり、童子は、そういう髪形をする年齢の子供である、と言えよう。

この年齢の子供達は、好んで年頃<sub>ニオホコ</sub>が似寄子<sub>ヨチ</sub>等すなわち同年輩が集まって、時に髪がワワラになるのを無頓着に踏ね廻り、時に互いに髪を遊びウナキハナリにしたり結びあげたりまたワワラにしたりする。これが竹取翁の回想であると共に児童観察の内容でもあった。

## 2・5 ヲグナ・ヲミナ・ヲトコ・ヲトメ

記によれば、ヲウスノミコトは、称名<sub>タケル</sub>がヤマトタケル、亦名<sub>ミコト</sub>が「倭男具那」(景行<sub>記</sub>)であった。紀は亦名を「日本童男<sub>此云2景行紀</sub>」(万3527<sub>景行紀</sub>)と記している。しかし、ヲグナは固有名詞ではない。

ヲグナの対称語は「乎美奈」(万43/17)すなわちヲミナである。ヲは「乎加母」(小<sub>3527</sub>「乎都久波」(小<sub>3396</sub>「小波」)に見られる小である。大小の形容詞というより、美称・愛称の接頭語である。

グ・ミは、イザナギ・イザナミ・アハナギ・アハナミ等に見られるように、男女の対偶の表示である。

ナは、「於伎奈」(万41<sub>28</sub>「於干奈」(中<sub>16</sub>「中」)、「己<sub>テ</sub>

ガ之心」(万<sup>1741</sup>巳)・「那禮」(推古紀<sup>21</sup>年、汝),「麻奈」(万<sup>340</sup>愛)等に見られる人である。

以上を要約すれば、ヲグナ・ヲミナは、“少男・少女”を意味する。但し、その若さに対する美称・愛称の意味が龍められている。

少男・少女を、紀はヲトコ・ヲトメと訓註している。(表 2.5 参照)

表 2.5 ヲトコ・ヲトメの表記

	ヲ ト コ	ヲ ト メ
仮名書	袁 登 古 (記上)	袁 登 売 (記上)
	袁 等 古 (記上) 注 1	
	烏 等 孤 (神代紀上) 注 2	烏 等 咩 (神代紀上) 注 2
	乎 等 古 (万 <sup>43</sup> <sub>17</sub> )	烏 苔 咩 (仁徳紀 <sup>16</sup> 年) 袁 等 咩 (万 <sup>8</sup> <sub>04</sub> ) 乎 登 女 (万 <sup>34</sup> <sub>27</sub> ) 尾 迹 女 (万 <sup>37</sup> <sub>91</sub> )
当字	壮 夫 (紀神代紀上)	
	少 男 (神代紀上)	少 女 (神代紀上)
	壮 (万 <sup>20</sup> <sub>10</sub> )	丁 女 (万 <sup>37</sup> <sub>91</sub> )
	壮 子 (万 <sup>9</sup> <sub>83</sub> )	処 女 (万 <sup>53</sup> <sub>1809</sub> )
	壮 士 (万 <sup>17</sup> <sub>59</sub> )	未通女 (万 <sup>1759</sup> <sub>2351</sub> )

注 1 壮夫の訓註 注 2 少男・少女の訓註

表中の仮名は、ヲがワ行、トが乙類である。コ・メはヒコ・ヒメの場合と同様に男女の対偶の表示である。したがって、ヲトコ・ヲトメの原義は、ヲトが問題なのである。

ヲトコ・ヲトメの語の用例によれば、ヲトの語は童貞・処女には無関係である。また、ヲトは同胞間の長幼を意味する兄弟のオトでもない。後者は、汝登多那婆多(記<sup>弟</sup>欄機)に見られるごとく、オがア行音である。

ヲトの意味は、表のヲトコへの当字が示すごとく、“少く壮りなる”であろう。記伝もヲトコ・ヲミナを「若く壮なる男」・「若く盛なる女」(記<sup>佐</sup>代四)としている。

しかし、ヲトは単に若・壮・盛を意味する語ではない。延喜式によれば、上代には立春の日に主水司が前年に「謀治」した井戸の水を天皇に「供奉」していた。これが若水である。

立春は、太陽が「彼方」(万<sup>26</sup><sub>83</sub>)・「乎知可多」(万<sup>3299</sup><sub>の成本</sub>)・「越方」(万<sup>20</sup><sub>14</sub>)の運行を終えてその原点に立戻る日、春陽、青陽として蘇生する日、すなわち若返る日であった。このヲチからの“立戻り=若返り”は正に「変若」・「変若反」である。

もと、彼方・越方を意味したヲチは、立春の解釈を通じて、復本・若返りを意味するようになった。それが、万葉「和我佐可理 伊多久久多知奴 久毛而得夫 久須利婆式等母 麻多遠知米也母」(万<sup>8</sup><sub>47</sub>)・「石網乃 又麥若返 青丹吉」(万<sup>10</sup><sub>46</sub>)・「從古…麥若云水會」(万<sup>10</sup><sub>34</sub>)…という形で保存されたのである。

ところで、成人式の形態は種々あるが、共通する意義は、幼童として死に一人前の男子または女子として蘇ることであった。ヲトは、この意味における“少く壮りなる”である。すなわち、“成人したばかりの若く壮なる男・若く盛なる女”，これがヲトコ・ヲミナであった。

### 3 出生観・成長観

#### 3.1 アル——出生観——

##### 3.1.1 アル

記紀・万葉では人の出生を、親に即していうときはウム(嶋)・ナス(嶋)，子に即していうときはアル(阜)・ナル(嶋)とするのが一般らしい。後世にはウマル(阜二)ウマレル(阜二)の語もある。子に即していうときは、英・独では一般に be born・geboren werden という受動形で表現される。とくに能動態で表わすときは、come to the world・see the sight・zur Welt kommen・das Licht der Welt erblicken 等の熟語しかない。

無力な新生児の出生を能動的・自動的な言葉で表現したことの背景に、古代日本人の心性が偲ばれる。

アルの仮名書例の初見は「其御子者阿禮座<sup>阿禮二</sup>孚以音<sup>音</sup>」(仲哀<sup>記</sup>)、次ぎが「日知之御世從 阿禮座師 神之尽」(万<sup>9</sup>)である。いずれも、敬語のマス(坐・座)が添えられている。

##### 3.1.2 アルとアラワル

出生は、ある生の現世への出現であった。ウム(嶋)生ム)からウマハル(嶋)蕃殖(万<sup>4</sup>恭紀)が転成したように、アルからアラハル(阜二)が転成してもおかしくはない。アラハルの仮名書例には、万葉の「安良波路萬代母 佐禰乎佐禰氏婆」(万<sup>3414</sup><sub>略</sub>は東国の説)がある。「埋木之 不可顕事 爾不有君」(万<sup>13</sup><sub>88</sub>)は訓読例の一つである。他・四のアラハスは「阿良波佐受」(万<sup>8</sup><sub>54</sub>)・「安良波之」(万<sup>40</sup><sub>94</sub>)等と

表記されている。

アルとアラハルとの差異は、次のごとくであろう。アルは無と有との断絶において捉えられた生の出現であった。だからその反対語は、「違罪波…速佐須良比咩登云神、持佐須良比失氏牟氏」(延喜詞、六月晦大説)・「照月之将失日社 吾恋止目」(万<sup>30</sup><sub>04</sub>)のごとく、ウス(皇<sup>下</sup><sub>二</sub>)であった。アラハルは既に有の世界のことである。有の、感性に触れぬ状態から触れる状態への移行であった。だからその反対語は、「宇麻具多能 禰呂爾可久里為」(万<sup>33</sup><sub>63</sub>)のごとくカクル(皇<sup>下</sup><sub>二</sub>)であった。

### 3・1・3 アル(生ル)とアル(有ル)

出生は現世における存在の出発であった。原始的心性において、アル(生ル)からアル(皇<sup>四</sup><sub>ル</sub>)が転成してもおかしくない。アル(有ル)の仮名書の初見は、「ガアル」は「故志能久邇邇 佐加志売速阿理登岐加志互」(皇<sup>上</sup>)、「デアル」は「奴延久佐能 売邇売阿禮婆」(皇<sup>上</sup>)である。なお、「ガアル」の万葉における表記例に「之多具毛安良南敷」(皇<sup>35</sup><sub>16</sub>)・「在有而 後毛将相登」(皇<sup>31</sup><sub>13</sub>)等がある。

出生と存在の関連に関する上代人の思想は、記紀の開闢神話に窺うことができる。

記では、神々の出現は、別天神・神世七代が「成」、岐美2神の国生み、神生みが「生」である。訓は、成は後にも触れるがナル、生は最初の字に(訓<sup>生</sup><sub>下</sub>此<sup>字</sup>)という註が施されている。これは、ナルがウムよりさきだ、という思想の表明である。当面の問題はアル(生ル)とアル(有ル)であった。

紀の本文では、まず「神聖生<sub>2</sub>其中<sub>1</sub>焉」・「時、天地之中生<sub>2</sub>一物<sub>1</sub>、状如葦牙<sub>1</sub>」のごとく「生」が用いられる。次いで、「便化<sub>2</sub>為神<sub>1</sub>…凡三神、乾道独化」のごとく「化」が主となり、「次有<sub>2</sub>神…次有<sub>2</sub>神」で「有」が4耦神に4回使用されて、神世七代の記載を終え、以下の諸冉2神の国生み・神生みに至って「生」が再び使われている。

紀の冒頭はシナ古伝承を総括した一般論で、その総括の核心すなわち紀の開闢神話の基本構想が「天先成而地後定。然後、神聖生<sub>2</sub>其中<sub>1</sub>焉」だったのである。この「生」はアルと訓むに相応しい。「生<sub>2</sub>一物<sub>1</sub>」の「生」は主語のない他動詞であるが、意味するところは「一物生」であろう。してみれば、「神聖」は「一物」である。そして、この「一物」から「三神」が「化」するのである。

紀における神々の出現の順序は、かくして、生<sup>ル</sup>・化<sup>ル</sup>・有<sup>ル</sup>、そして生であった、と言える。アル(生ル)とアル(有ル)だけを取り上げれば、アル(生ル)はアル(有ル)を捉えるものであり、アル(有ル)はアル(生ル)

を超えるものではない。

このアル(有ル)は、「デアル」ではなく、「ガアル」である。そして、「ガアル」ということは「人間が有<sup>ル</sup>」ということであった。その人間が現世に有<sup>ル</sup>ことの発端がアル(生ル)だったのである。生哲学は歴史や文化の「化」を、実存哲学は死と「有」を、そして嘗ての日本哲学は「生<sup>ヲ</sup>」を主題とした。なぜ、アル(生ル)を主題としなかったのであろうか。

## 3・2 ナル——発達観——

### 3・2・1 ナル

人の出生を意味するナルの仮名書の初見は「於夜那斯爾 那禮奈理鷄迷夜」(推古紀<sup>21</sup>)、次ぎは「…比等波伊波紀欲利 奈利提志比等迦」(万<sup>7</sup><sub>00</sub>)である。これにより、万葉の「殖木 実成時」(万<sup>17</sup><sub>05</sub>)はナル、「多知波奈能成流其夷者」(万<sup>41</sup><sub>11</sub>)はナレルと訓めるであろう。

このナルは、記伝にいう「無りし物の生り出るを云<sup>フ</sup>」(配伝三<sup>神代</sup>)に相当する。したがって、このナルは、有に内蔵された無形が有形に変化・発達することを捉えたものである。人は親から、果実は果樹から、生り出たものである。

ところで、記の冒頭の「天地初発之時、於<sub>2</sub>高天原<sub>1</sub>成神名」は一般にナレルと訓まれている。しかし、引き続いて記載される「三柱神」には物実がない。したがって、このナルは全くの無から有への転化である。この三神に続く2神は、「如<sub>2</sub>葦牙<sub>1</sub>因<sub>2</sub>萌騰之物<sub>1</sub>」を物実としてナレル神である。しかし、この萌騰之物を押し出した物実は語られていない。また、以上の5神に続く神世七代の神々にも物実はない。記伝に言う「無りし物の生り出る」過程には、物実の無い場合と有る場合とがあったのである。

しかし、物実のない場合にも、天に高天原、地に国という有の場所があった。この場所は単なる空間ではない。これを神々の母胎とすれば、別天神五柱と神世七代の神々のナルは、まず、ともに斉しく「無りし物の生り出る」の範疇に属する。そして、この範疇は、さらに大きな、場所という有の世界における形の変化、すなわちメタモルフォーゼの範疇に属する、と考えられないであろうか。

記伝がナルの意味に、上記のほか、「此物のかはりて彼物に<sup>ナ</sup>化<sup>ル</sup>るを云<sup>フ</sup>」・「作事<sup>ナ</sup>の成<sup>ル</sup>終<sup>ル</sup>るを云<sup>フ</sup>」を区分し得たのは、上記の範疇を認識し得たからであろう。

## 3・2・2 ヒトナル

ヒトナルは、ヒトとナルが結合した熟語動詞(昌)である。ヒトナリはこれが名詞化したものであろう。今日の「ひととなり」という語は、①岩波 国語辞典によれば「持ち前の人柄 うまれつき」、②明解 古語辞典によれば「身長、からだつき」とある。広辞苑は①と②を併記している。以上によれば、②が古く、①は後世のもの、と判断されるかも知れない。実はその逆である。しかし、仮名書のヒトナリの初見は①のほうで、「ひととなり少し細高にして」(宇治拾遺11)がそれである。

ヒトナルという語は古い。その初見は、「神亀五年」(728年)の作として万葉に収載されている「人跡成 事者難乎 和久良婆爾 成吾身者」(1785)である。ヒトのヒが日神や靈昆に繋がるとする思想的伝統は、末だ即自態において生きていたと考えられる時代である。しかし、上掲の歌句の発想は、仏教の輪廻説を背景としたもので、意味は“人として現世に生れてくる”である。①の「うまれつき」の根拠はこれであろう。憶良の貧窮問答の一節「和久良婆爾 比等波安流乎 比等奈美爾 安禮母作乎」(万92)に見えるヒトナルは、ナルが生ルか有ルかは分らない。しかし、いずれにしても、神亀五年のヒトナルと同じ発想であろう。

宣化紀4年の「以<sub>2</sub>皇后橘皇女及其 子<sub>1</sub>合<sub>2</sub>葬干是陵<sub>1</sub>」(皇后崩年伝記無載、儒子「若 蓋未<sub>2</sub>成人<sub>1</sub>而葬歟」)の儒子は、乳幼児を意味する。「儒子」として死亡したので、その母の側に葬られたのであろう。紀によれば、皇后は「生<sub>2</sub>一男三女<sub>1</sub>」と記され、3女1男はそれぞれ皇妃となり、また「二姓之先」と記されているから、「子」はこの3女1男のなかに数えられていないことになる。人と生れても、乳幼児期のある年齢までは、人に数えられなかったらしい。大きな乳幼児死亡率のために、人間観が歪められていたのであろうか。

憶良が子の死を悼んだ長歌の一節「産<sub>ル</sub>禮<sub>有</sub> 白玉之 吾子古曰者…何時可毛 比等奈理伊<sub>有</sub> 天」(万94)に見えるヒトナルは、その反歌「稚ければ道行き知らじ幣はせむ 黄泉の使者負ひて通らせ」(万95)によれば、新生児から幼年期における死までの発達を捉えたものである。また、ヒトナリイデは、人に数えられるある年齢を越していたことを意味するものであろう。

「儒子」をヒトノコに数えぬ人間観の存在は、予想外のことであった。しかし、これを背景とすることにより、憶良における「産<sub>ル</sub>禮<sub>有</sub>…比等奈理伊<sub>有</sub> 天」のイヅ「出ヅ」の重複が無意味でなかったことが理解される。また、

記紀が伝えるオホサザキノミコトの次ぎの言葉の含蓄も理解されるのである。

それは、父の天皇からの下問「(兄弟のなかで)長<sub>イサカノクサギ</sub>少孰尤焉」に対するミコトの「長者多経<sub>2</sub>寒暑<sub>1</sub>、既為<sub>2</sub>成人<sub>1</sub>、更無<sub>レ</sub>悒矣。唯少子者、未<sub>レ</sub>知<sub>2</sub>其成<sub>1</sub>不<sub>1</sub>。是以、少子甚憐之」(応神紀40年)という応答である。記は、「…未<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>人。是愛」(応神)のごとく簡略化されている。

なお、憶良が表現した古日のヒトナリイヅル過程は、「明星の明るく朝は 敷妙の床の辺去らず 立てれども居れども、共に戯れ 夕星の夕になれば いざ寝よと手をたづさはり 父母もうへは物離<sub>ナサカ</sub>り 三枝の中に寝むと 愛しく其が語らへば」である。「身長」や「からだつき」でないことは明らかであろう。

## 3・2・3 ヒトナリ

「是天皇為人、器宇清通、神襟朗邁」(宣化紀)・「鎌子連、為人忠正、有<sub>2</sub>匡濟心<sub>1</sub>」(皇極紀年)の為人は、いずれもヒトナリと訓まれている。上記の諸例を背景とすれば、ほかに訓み方はなかろう。また、このヒトナリは、上記のヒトナルの過程を経たその結実と考えるほかあるまい。

このヒトナリは、漢語では資性が最適かも知れぬが、資性はこの形成過程を含まない。ヒトナリは、記伝が区分したナルの3義と、「人跡成事者難」・「其成不」・「寒暑」等の困難、危険をくぐり抜けてきたヒトの歴史を含むパーソナリティー概念である。これに「からだつき」等の概念が加わるのは、遙か後世のことである。

## 4. 養育観

育の字の古形は、説文によれば、子の字の古形の倒立と、月(ニクヅキ)の古形との組合せである。古意は、古形が象徴するとく、子を生むことにあった。説文が示す「養<sub>レ</sub>子使<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>善也」は、生んだ後のことである。

しかし、もと生むことを意味した字が、人と年月を通じて養うこと、さらには道德指導をも意味するに至った、ということは極めて意義深いことである。なぜなら、人間にあっては、生むことは直ちに養うことであり、生まれることは直ちに養われることである。人間の新生児には、自発性はあっても自活性は絶無だったのである。

## 4・1 ヒダス

養育を意味するヒダス(儒)の仮名書の初見は「比陀斯」(上宮聖徳法王帝)である。比は日と同じく甲類に属する。「日足奉」(聖仁)・「奉<sub>レ</sub>養」(神代)等に施されている後世の傍訓は、恐らく上記によるものであろう。万葉の

「何時可聞 日足座而」<sup>(33)</sup>は、上記の意味を保存しつつ、「氣長足姫」<sup>(仲喜紀2年他)</sup>の「足」が「多良志比咩」<sup>(万13)</sup>・「多良思比売」<sup>(万35)</sup>とされると同様に、ヒタラスと敬語化したものである。

ヒダスの語義は、ヒにヒを加う、ヒを充足させる、ということである。ヒの積み上げである。そのヒが、暦日のヒか、産霊・靈性のヒか、それは分らない。

皇子女の場合に動員される「諸部」は、①乳母、②湯母、③飯嚼、④湯座であった<sup>(神代紀下)</sup>。纂疏によれば、①は「謂<sub>2</sub>以<sub>レ</sub>乳<sub>レ</sub>児者<sub>1</sub>」、②は「掌<sub>2</sub>湯菜<sub>1</sub>之人」、③は「嚼<sub>レ</sub>飯哺<sub>レ</sub>児者」、④は「洗<sub>2</sub>浴兒<sub>1</sub>」とある。壬生部<sup>(推古紀15年、皇極紀1年には乳部とある)</sup>・湯部<sup>(孝徳紀、大化2年)</sup>等の部は、それぞれの養育経費を担当する部であった。

上記から推察すると、ヒタスは主として營養・保健の側面から皇子女の身体発達に奉仕することであった。しかし、それを「日・足ス」という語で表現した思想的背景は、依然として未詳である。

#### 4・2 ヤシナフ

ヤシナフの仮名書の初見は「於<sub>レ</sub>瀾能鳥咩咩鳥<sub>レ</sub>多例<sub>レ</sub>擲始<sub>レ</sub>難播務」<sup>(16年)</sup>「伽之古俱等望 阿例擲始難破務」<sup>(16年)</sup>である。このヤシナフを扶養するという意味にとれば、小子部連の場合<sup>(参照)</sup>の養の字がヤシナフ(養)と訓まれていてもおかしくない。

ヤシナフのナフは、アキナフ・イザナフ・トモナフと同様の、他の品詞の語幹と結合して動詞を作る接尾語と考えられる。ヤシナフは他：四である。

扶養の意味を確保しながら、ナフを接尾語とする古語は、ヤシホ(名詞、染汁に何度も浸して染めること)とヤス(形容詞、安・易)よりほか見当らない。人間の存在共同の仕方から見れば、ヤシホは末端的である。しかし、生活のヤスラカサや身心のヤスラギの確保は基本的である。扶養は人間の存在共同の基本である。とすれば、ヤシナフの原形はヤス・ナフであろう。

ヤスは、安心スル・休息スルを意味する動詞ヤスムの語幹でもあった。紀に「(神功皇后)拳<sub>レ</sub>兵撃<sub>2</sub>羽白熊<sub>1</sub>而滅<sub>レ</sub>之。謂<sub>2</sub>左右<sub>1</sub>日、……我心則安、故号<sub>2</sub>其処<sub>1</sub>曰<sub>レ</sub>安」<sup>(撰政前紀)</sup>とある。前の安はヤスシ、後の安はヤスと訓まれている。地名ヤスは、今日の福岡県朝倉郡夜須町である。ヤスは形容詞ヤスシの語幹でもあった。

以上を要約すれば、ヤシナフの原義は“生活や身心のヤスラギを確保する”ということであろう。

#### 4・3 ハグクム

万葉の「大船に妹乗るものにあらませば 羽具久美も

ちて行かましものを」<sup>(万35)</sup>は、ハグクムの仮名書例の初見である。この語の意味は、この歌だけからは、不可能である。また、「旅人の宿りせむ野に霜降らは吾が子羽<sub>・</sub>天の鶴群」<sup>(万91)</sup>の羽の訓は、この歌だけからは、不可知である。しかし、(とも記す)の意味はツツムである。歌の全作から語意は想察可能である。上掲の2首は、偶然ではあるが、ハグクムと羽＝に関して、相互補足的関係に在ったのである。

ハはハネ(羽・翼)であることは間違いない。しかし上記のグクムがの字でどの程度にか表意されたにしても、単独のグクムという語が上代に存在していたか、またもと何を意味していたか、を明らかにしなければ、ハグクムの原義は把握されない。

というのは、万葉にはなお「武庫の浦の入江の渚鳥羽具久毛流 君を離れて恋に死ぬべし」<sup>(35)</sup>にハグクモルという類語もあり、何時から始まったかは不明であるが刀剣用語に名詞ククミがある。また、倭名抄には「訓<sub>・</sub>久都波美<sub>・</sub>俗云久美」という馬具名があり、平安女流文学には「うつくしげなる御乳をくくめ給ひ」<sup>(源氏)</sup>・「親鳥の虫などもきて(子雀に)くくむるもいとうらたし」<sup>(枕草子136)</sup>という動詞もあるからである。

ところで、「塩干乃 三津之海女乃 久具都持 玉藻将<sub>・</sub>刈<sub>・</sub>率行<sub>・</sub>見」<sup>(万93)</sup>のクグは、倭名抄に見える「莎草具具」であろう。カヤツリ草科の多年草であるが、海浜ならハマスゲの別称と考えるのが至当である。都は、「…の」であるが、ときに「…製の」・「…製のもの」をも意味する。玉藻を刈る海女の携帯品ならば、ハマスゲで編んだ袋であろう。

袋は、農耕以前の採取経済時代においては、海浜・山野に食糧を蒐集するに際しての必需品であった。麻・木綿の栽培以前においては、繊維が割に丈夫なイヌクグ・シオクグ・ハマスゲは、適当な製袋材料であったに相違ない。

この名詞クグからクグ製の袋を意味する名詞クグツが転成し、この袋を媒介として包むを意味する動詞クグムないレクグムが成立したのは、恐らく弥生期以前のことであろう。

ハグクムのグクムは、上記の歴史を経た後に、ハネと結合したものに違いない。ハグクモル(ハグクム)・クグム(クグム)の初見はハグクムの初見より遠く後世のことであった。ハグクムの原義は、“身を以て幼弱者を外界の危険や環境の圧力から防衛し、幼弱者の身心のヤスラギを確保する”ということであろう。

## 5 教育観

### 5.1 スタツ—教育目標—

スタツ（巢立ツ）は、①鳥の子が巢から飛び立ってどこかに去って行くこと、今日では転じて、②学校を卒業して社会に出ること、を意味することは周知のことである。①は万葉の「鳥嶋たて飼ひし雁の子栖立ちばな 櫃の丘に飛びかへり来ね」（<sup>18</sup>/<sub>2</sub>）のスタツと全く同義である。

このスタツは、自動詞（四）である。ところが、スタツには他動詞（ト）もあったのである。他動詞のスタツは、自動詞のスタツと、スは同じであるが、タツが異なるのである。スタツの自動—他動の別は、タツの自・四と他・下二との違いなのである。他・下二のタツには、「天爾有或 神楽良能小野爾 茅草茹 草茹婆可爾 鶉乎立毛」（<sup>38</sup>/<sub>87</sub>）のタツに見られるように、“飛び立たせる”という意味もあったのである。他・下二のスタツのタツはこれで、スタツは“巢から飛び立ってどこかに去って行かせる”を意味する。

他・下二のスタツは、記紀・万葉には見出せない。その初見は、受動形ではあるが、「松が枝のかよへる枝をとぐらにて ずだてらるべき鶴の難かな」（<sup>11</sup>/<sub>11</sub>）である。ところで、この歌の作者は、子鶴の巢立ちを見たのではなく、親鶴からヤシナヒヤハグクミを受けているところを眺め、スタチをヤシナヒヤハグクミの果てにある最終目標として促えているのである。しかし、このスタツは鳥のことである。人事に関する比喩的使用の初見は未詳である。世襲制で、職業教育の施設を持たぬ社会では、比喩的使用の機会が殆どなかったであろう。

付 スタツとソダツ、オホス

ソダツ（<sup>他</sup>/<sub>下二</sub>）・ソダテル（<sup>他</sup>/<sub>下二</sub>）は、ソダツ（<sup>他</sup>/<sub>四</sub>）と同様に、初見は未詳である。しかし、ソダツとスタツは、共に自・四と他・下二に活用され、第1音は共にサ行音である。ソダツの原形はスタツよりほかに考えられない。とすれば、ソダツは、出生に始まりスタツに終る成長過程が促えられ、これを表示するのに終点のスタツを以てした、ということであろうか。

なお、ソダツ（<sup>他</sup>/<sub>下二</sub>）に意味が近い語を万葉に求めると、「夜麻夫枝波 奈泥都都都保佐牟 安里都都母」（<sup>43</sup>/<sub>02</sub>）に見えるオホス（<sup>ホ</sup>/<sub>生ス</sub>）であろうか。自動詞は「伊久美陀気淤斐」（<sup>雄略</sup>/<sub>記</sub>）のオフ（<sup>オ</sup>/<sub>生フ</sub>）である。

### 5.2 タツサハル—教育態度—

①「吾が子古日は…タ星のタになれば いざ寝よと手乎多豆佐波理 父母もうへは勿離り」（<sup>万</sup>/<sub>04</sub>）・②「余地

古良等 手多豆佐波理 遊びけむ」（<sup>万</sup>/<sub>04</sub>）・③「思ふ度知 馬うち群れて 多豆佐波理 出て立ちくれば」（<sup>万</sup>/<sub>93</sub>）・④「子等 携 遊磯麻」（<sup>万</sup>/<sub>96</sub>）は、①の「テ（手）ヲ」が、テヲタズサハリ・テタズサハリ・タツサハリと、消えてゆく過程を示している。

今日のタツサハル（<sup>島</sup>）は“あることに従事する”という意味しかない。しかし、①・②は“手で手を繋ぐ”、③・④は“一諸に”あるいは“心の手を繋ぐ”の意である。

タツサハルのタはテ（手）、サハルは触<sup>サ</sup>わる、ツはデあるいはニであろう。原義は、①・②に見られるごとく“手を手で触わる”・“手を手に繋ぐ”であろう、正に skinship の実践である。スキンシップは、①が示すごとく、とくに幼少者の身心一体的欲求である。

教育に携わるということは、まず、被教育者とテヲタツサハルことではなかったであろうか。

### 5.3 イフ—教育コミュニケーション—

#### 5.3.1 カタル

既に史書が撰述されるようになった時代になお語部<sup>カタル</sup>が存在していたことは、延喜式に明らかである。大嘗会に動員される語部の役割に、統治組織の骨格をなす氏姓の来歴譚としての「帝皇日継」・「先代旧事」（<sup>記</sup>/<sub>序</sub>）等を奏することがあった。

カタル（<sup>他</sup>/<sub>四</sub>）の仮名書の初見は、神代記の「阿麻波勢豆加比 許登能 加多理其登母 許遠婆」である。伝記は上掲のコト（事）ノ・カタリ（語）・ゴト（言）を「彼ノ言通使の如く、此歌の傳はり往て、今此ノ事は、遙き後世までも、故事の語言にぞ為なむ、と云ほどの意なるべし」（<sup>十</sup>/<sub>神代元</sub>）と解釈している。

カタルは、万葉では、時に「梅の花夢に加多良久」（<sup>85</sup>/<sub>2</sub>）と用いられる。しかし、多くの場合「余呂豆余能 可多良比具佐」（<sup>40</sup>/<sub>00</sub>）となるごとき内容を伝承するのに「後將見入者 語継金」（<sup>36</sup>/<sub>4</sub>）・「加多利継 伊比都賀比計理」（<sup>89</sup>/<sub>4</sub>）・「聞継人毛 可多里都具我爾」（<sup>41</sup>/<sub>65</sub>）のごとく使用している。後世の「物語」はこの伝統を受け継ぐものであろう。「淡海県物語為」（<sup>万</sup>/<sub>12</sub>）がそれを示している。

カタルの内容（事）は社会の基本に関し後世に伝達したい事項であり、その（言の）形式がカルタであったと考えられる。カルタは、帝皇日継・先代旧事に本来・祖裔、物語に発端・経過・終末があるごとく、順序・形式を整えて伝達することである。カタ（形・型）に淵源する語かも知れない。

#### 5.3.2 ツグ

ツグ（<sup>他</sup>/<sub>下二</sub>）の仮名書の初見は「保等登芸須 鳴等比



等都具」(万<sup>39</sup><sub>18</sub>)であろうか。萬葉ではこのツグに告が多く用いられている。しかし、「語之告者 古所念」(万<sup>31</sup><sub>3</sub>)・「語告言繼獎往」(万<sup>31</sup><sub>7</sub>)の告は、告グ・継グの両意に解される。

ツグ(告グ)は報知することである。しかし、その原義は、布告・広告のごとく空間的拡大ではなく、カルタと同様に時間的連絡すなわち継承・伝承を志向するものであったらしい。

### 5・3・3 トフ・コタフ

トフ(問フ)のトに「可是乃等」(万<sup>34</sup><sub>53</sub>)・「於登」(万<sup>39</sup><sub>88</sub>)のごとき、オト(音)のトに当用される乙類が用いられることのあることを考えると、表5.3の(a)は物理的、(b)・(c)は人倫的であるかに思える。(a)~(c)に問が当用されているのは、上記の区別の崩壊過程を示すものであろう。

表5.3 万葉におけるトフの意味と文字

	問	トに当用された万葉仮名	
		乙 類	甲 類
(a) 音声を 発する 言交す	481	等 811	
	546	登 3540	
	602	騰 812	
	1007	4125	
(b) 訪問する	1659		度 4127
(c) 質問する	159	登 4436	刀 794
	230	(例外)	4392
	460		斗 景行記

トフ(質問スル)は、ある事象の認識体系(A)における欠如部分(C)を補填するに足る認識を求める手続きである(図5.3参照)。問ヒすなわちバツスの認識をロゴスの認識に変換する手続きの古代的形態にウラトヒ(点問：肥前国風土記 訪占：常陸国風土記)がある。

崇る神の不明の名と意思をフトマニに表示させる手続きである。表示されたものをコタへと判断(ウラアへ)する心証は(ウラ)は質問(ウラトヒ)にするに働いた心当(ウラ)である。それを支えるのが、図のAにおいて働くBであろう。

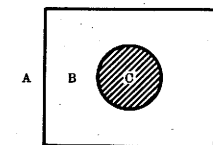


図5.3 質問内容の構造

トフは相手のコタフを期待する。この期待は、人間存在に基本的な信頼とそれに応える真実の問題に関連する。古事記が伝える「(天字受売命が)悉追<sub>2</sub>聚<sub>2</sub>鮪<sub>2</sub>広<sub>2</sub>鮪<sub>2</sub>狭<sub>2</sub>物<sub>1</sub>以<sub>2</sub>問<sub>2</sub>-言<sub>2</sub>汝<sub>2</sub>者<sub>2</sub>天神御子仕奉<sub>1</sub>耶<sub>1</sub>之時、諸魚皆仕奉<sub>1</sub>白<sub>1</sub>之中、海鼠不<sub>レ</sub>白<sub>1</sub>、爾天字受売命謂<sub>2</sub>海鼠<sub>1</sub>云、此口乎不<sub>レ</sub>答<sub>1</sub>之口而、以<sub>2</sub>紐<sub>2</sub>小<sub>2</sub>刀<sub>1</sub>拆<sub>2</sub>其<sub>2</sub>口<sub>1</sub>」(上巻)という神話は上述の人倫の自覚の反映であろう。

上述を要約すれば、トフ(質問スル)とは、相手のコタフを期待してなされる、ある事象に関する認識の欠如部分を補填する手続きである。

コタフの語の初見は、100初めの「山彦のこたへするまで」(古今集<sup>521</sup>)であろう。記紀・万葉には、答・応報等は見られるが、仮名書例はない。

コタフの本質を示すものはフトマニであろう。フトマニにおける客観的現象(骨片の火圪等)と心証との合致を、心証に即して言えばウラアフであり、フトマニに即して言えばコト(事)アフである。図に就いて言えば、Cに関するヒトに対して、Cにビタリと嵌るもの、すなわちコト(事)アフ(合フ)ものがコタへである。コタフの原義はコト(事)アフ(合フ)だったに相違ない。

### 5・3・4 タツヌ・ミチビク

トフとタツヌが同等に質問を意味するのは、平安以降である。それ以前のタツヌは「君之行 気長成奴 山多都禰迎加将行 待爾可將待」(万<sup>78</sup>)に見られるごとく、単なる質問ではない。

万葉におけるタツヌには、下記の3義がある。①手がかりを頼んで先きに行った者を追跡する。例：速妻四高爾有世婆 不知十方 手網乃濱能 尋來名益(万<sup>17</sup>)②何かによって所在不明のものを探索する。例：毎年爾貼之走婆 佐枝多河 鰐八頭可頭氣氏 河瀬多頭禰牟(万<sup>41</sup>)③物事の淵源・道理を探究・解明する。例：宇都世美波加受奈吉身奈利 夜麻加波之 佐夜氣吉見都都 美知乎多頭禰奈(万<sup>44</sup>)共通点は、あるものを何かによって探索することである。しかし、認識にもっとも関係が深いのは、③であろう。

③に引用した歌は、「臥<sub>1</sub>病<sub>2</sub>悲<sub>2</sub>無<sub>2</sub>常<sub>1</sub>、欲<sub>1</sub>修<sub>2</sub>道<sub>2</sub>作<sub>2</sub>歌<sub>2</sub>二首」の一つである。他の一つは「和多流日能 加氣爾技保比呂 多豆禰弓奈 伎欲吉曾能美知 未多母安波無多米」(万<sup>44</sup>)である。探索の対象は、道・美知、すなわち人間の正しい在り方である。

①・②を背景にして③を考えると、タツヌは、トフと異なり、自主・自律の知識探求で、他者からの知識提供を期待していない。しかし、タツヌは「何かによって」

行う「探索」である。その「何か」は手蔓・手懸り：手段・方法：スベ（術）等であろう。

そうしたものを意味する古語にタヅキがある。タヅキは、原形が「テツク（手付く）」かとも謂われ、タドキとも変化する語である。その用例には「痛毛為便無三…<sup>イタモスベナミ</sup>難念<sup>オヘドモ</sup> 田村乎白二…<sup>ヲシラニ</sup>哭耳泣管<sup>オノミナキツ</sup>」(万<sup>6</sup><sub>19</sub>)「多土技乎不知村<sup>ヲシラニ</sup>肝<sup>イサヨヒ</sup> 心不知欲比<sup>トキヌノ</sup> 解衣 思乱而」(万<sup>20</sup><sub>92</sub>)等がある。タヅキを持たずして暗中摸索するのが「夕闇 路多頭多頭四<sup>ツクマナテ</sup> 待月而」(万<sup>7</sup><sub>09</sub>)であろう。これには「入江二求食<sup>アサル</sup> 鷹鷲<sup>アシタヅ</sup> 乃<sup>ナ</sup> 痛多豆多豆思<sup>アサ</sup> 友無二指天」(万<sup>5</sup><sub>75</sub>)のごとき用例もある。

また、何等かのタヅキを把握し、これにより対象に近接するのが「伊多度利興利提<sup>ヨリテ</sup>」(万<sup>8</sup><sub>04</sub>)であろう。「拙久多豆何奈岐貳爾<sup>ニ</sup>」(日本紀大<sup>ニ</sup> 年<sup>ニ</sup>)のタヅカは、「多都可豆思<sup>ニ</sup>」(手撰林<sup>ニ</sup> 万<sup>804</sup>)と併せ考えると、「テツク」より「テツカム(手掴ム)」の系統ではなからうか。それにしても、意味は“頼り(手拠り)とするもの”で、タヅキと無縁ではない。

以上を要約すると、タヅヌの原型は、「テ(手)+○」らしい。しかし、○には、ツク(付ク)のほか、ツカヌ(束ヌ)・ツラヌ(連ヌ)等の候補があり、何れとも決め難い。③は、その洗練された後世の用例「流れをくみて源をたづねてこそよく侍るべき」(後一<sup>ニ</sup> 後一<sup>ニ</sup>)・「猛き武者の起りをたづぬれば」(増補<sup>ニ</sup>)をも考えると、80には既に“あるものを手懸りとして、ことの淵源・道理を探求・究明する”ことを意味していたらしい。

タヅヌのスベが不明で、探求者がこれを他者にトフ場合、期待するところは、対象に関する知識ではなく、手蔓・手段・スベに関する認識の提供であろう。終局的知識ではなく、過程の知識の提供が、知識面におけるミチビクことである。

ミチビクの仮名書は記紀・万葉には見当たらない。しかし、「船舳爾 道引麻遠志」(万<sup>8</sup><sub>94</sub>)が、仮名書の初見に準ずることには問題はなさそうである。「世間乃道<sup>ニ</sup>」(万<sup>8</sup><sub>92</sub>)・「世間之道<sup>ニ</sup>」(万<sup>9</sup><sub>04</sub>)は「美知乎多豆禰奈<sup>ニ</sup>」(万<sup>44</sup><sub>68</sub>)・「多豆禰弓奈 伎欲吉曾能美知<sup>ニ</sup>」(万<sup>44</sup><sub>69</sub>)と訓まれ、「裾引<sup>ニ</sup>」(万<sup>10</sup><sub>01</sub>)は「裾曳伎<sup>ニ</sup>」(万<sup>8</sup><sub>04</sub>)、「足引乃<sup>ニ</sup>」(万<sup>41</sup><sub>51</sub>)は「安之比奇能<sup>ニ</sup>」(万<sup>40</sup><sub>11</sub>)と訓まれているのである。

このミチビクに、紀は導の字を「問之曰、汝能為我導耶、対曰、導之牟。…為海導者<sup>ニ</sup>」(神武即位前<sup>ニ</sup> 海<sup>ニ</sup> 道<sup>ニ</sup> 東征<sup>ニ</sup>)のように当用している。

また、道と導との用い方の関係は、紀の「山中峻絶、無復可<sup>ニ</sup> 行之路<sup>ニ</sup>」(万<sup>1</sup><sub>1</sub>)。…時夜夢、天照大神訓<sup>ニ</sup> 于天皇<sup>ニ</sup>」(万<sup>1</sup><sub>1</sub>)。

『朕今遣<sup>ニ</sup> 八咫鳥<sup>ニ</sup>。宜以為<sup>ニ</sup> 導者<sup>ニ</sup>』。…是時…日臣命…乃尋<sup>ニ</sup> 鳥所<sup>ニ</sup> 向<sup>ニ</sup>」(万<sup>1</sup><sub>1</sub>)。仰視而追<sup>ニ</sup> 之。遂達<sup>ニ</sup> 于 田下界<sup>ニ</sup>。…于時、勅普<sup>ニ</sup> 日臣命<sup>ニ</sup> 曰、『汝忠而勇、加有<sup>ニ</sup> 能導之功<sup>ニ</sup>』。是以改<sup>ニ</sup> 汝名<sup>ニ</sup> 為<sup>ニ</sup> 導臣<sup>ニ</sup>』(神代<sup>ニ</sup> 代<sup>ニ</sup> 前<sup>ニ</sup>)に明らかである。目標地への道を、軍は日臣に嚮導され、日臣は「鳥所<sup>ニ</sup> 向<sup>ニ</sup>」を<sup>ニ</sup> 手懸りとして<sup>ニ</sup> 辿ったのである。なお、嚮導者に<sup>ニ</sup> クニノミチビキという傍訓もある。海導者に<sup>ニ</sup> 対応させたのかも知れない。しかし、郷は(サキウ)に通じ、郷導は嚮導と同義であるから、クニノは不要である。

上記のヤマトへの道は宣長の言う「ただ物にゆく路<sup>ニ</sup>」(記<sup>ニ</sup> 佐一<sup>ニ</sup> 直見<sup>ニ</sup>)であるが、天武紀13年に記された「八色之姓」の第5の「道師」は學術・技芸の道を世襲する姓であり、「世間乃道<sup>ニ</sup>」や「伎欲吉曾能美知<sup>ニ</sup>」は人倫の道であった。しかし、記紀・万葉におけるミチビクは、「ただ物にゆく路<sup>ニ</sup>」の嚮導でしかなく、學術・技芸や人倫の道における嚮導を意味するのには、平安朝の到来を待つよりほかはなかったのであろうか。

ミチのミは美称、チは、「稜威之道別道而<sup>ニ</sup>」(紀代<sup>ニ</sup>)が「伊都能知和岐知和岐弓<sup>ニ</sup>」(配<sup>ニ</sup>)と記されるところから明らかとなお、語幹である。しかし、単独の使用例はない。ミチはまず「物にゆく路<sup>ニ</sup>」である。ヒトはオス(押ス)の反対。手前に移動させることである。したがって、ミチビクは、乙の行くべき道の先にある甲が、乙を甲の方に引くごとく、乙の行くべき道を甲が示すことであらう。

#### 5.4 ラシフ

ラシフの仮名書は、記紀・万葉にはなく、その初見は奈良末期ないし平安初期の成立と見られる日本書紀私記(乙本)が、「教養<sup>ニ</sup>」(紀代<sup>ニ</sup>)に施した訓註「乎之不留<sup>ニ</sup>」であろう。教の字は、記紀ではしばしば用いられているが、万葉では詞書中に「諸善奉行之教<sup>ニ</sup>」(89<sup>ニ</sup>)・教諭<sup>ニ</sup> (41<sup>ニ</sup>)等とあるだけである。恐らく、ラシフ・ラシへは、万葉では歌材とはならず、教の字は、記紀では訓註を施す必要はなしと思われた程に常識化されていたのであろう。

私記の「乎之」と同じ仮名書例は、万葉に「為梅能<sup>ニ</sup>…知良麻久乎之美<sup>ニ</sup>」(万<sup>8</sup><sub>42</sub>)・「磯の浦に常乎び来栖む乎之<sup>ニ</sup> 杼里の 乎之伎我が身は君がままたに」(万<sup>45</sup><sub>05</sub>)とある。前者は惜シム、後者は愛シム(自愛)である。ラシドリは、古くはラシと呼ばれたが、「山川に鳥志二つ居て耦よく耦へる妹を誰か率にけむ<sup>ニ</sup>」(孝徳紀<sup>ニ</sup> 5年<sup>ニ</sup>)に見られるごとく、男女相愛の象徴であった。

愛は、存在の共同であり、一体化への営みであった。弟橘の入水は倭建への献身であり、「心さへ奉れる君に

何をか言はず言ひしと吾が為言まはむ」(万<sup>25</sup><sub>73</sub>)は相手への献心であった。献身や献心は、相手に自己を摂取させ、翻って相手を自己に摂取することである。それが一体化というものである。

だから、食の哀<sup>ラス</sup>須<sup>（記）</sup>（上）や着衣の於<sup>ラス</sup>須<sup>（仁徳紀）</sup>（40年）・哀<sup>ラス</sup>須<sup>（景行）</sup>比<sup>（記）</sup>は、ヲシム（愛シム）と同根である。いずれも、身につけることである。愛シム合う者はその別離・亡失を望まない。だから、別離・亡失を惜シムのである。

以上を要約すれば、ヲシフ（教フ）は、“愛シと思う相手に、自己の一部としてこれまでに愛シみつ身につけてきた知識・技術を、惜シみなく摂取させる”ことであらう。教えるためには学ばなければならない。マナブの原義は愛<sup>（12）</sup>ブであった。

#### 参 考 文 献

1) 橋本進吉；古代国語の音韻について，明世堂書店，

S 18（4版）

- 2) 木村俊夫；日本書紀編纂者の思想に就いて，刀江書院 S 14
- 3) 木村俊夫；日本書紀編纂者の思想に就いて（続篇），刀江書院，S 15
- 4) 木村俊夫；我が国上代に於ける家族道德思想の研究，哲学研究，32（S 23）6
- 5) 和辻哲郎；日本語と哲学の問題（続日本精神史研究 岩波書店，S 10）
- 6) 高山岩男；哲学的人間学，岩波書店，S 17
- 7) 利根川東洋；生みの哲学，理想社，S 17
- 8) 田中 晃；日本哲学序説，同文書院 S 17
- 9) 田辺 元；哲学通論（岩波全書）
- 10) 木村俊夫；学習を意味する倭語の原義，茨教紀，22（S 47）
- 11) 和辻哲郎；倫理学上巻，岩波書店，S 12
- 12) 木村俊夫；「学ぶ」ということばについて，児童心理，28（S 49），6

#### Original meaning of the Japanese old words related with the Education

Toshio Kimura

#### Abstract

This article is the philological and etymological study of the Japanese old words related with the education. But the aim of this article is to offer the problems and the suggestions for the psychological investigation of the growth, development, nursing, educational communications. Clarified original meanings are following. hito (human being): the solar and spiritual. midoriko (baby): the fresh, etc.